

研究面をサポートする機能は充実していますが、それだけでなく、中学・高校生や一般の国民も簡単な手続きでこの図書館が利用できるようになってきました。ケニアに在住する日本人子弟の高校生にもよくここで会いました。以上、予算面では国立とはいいながら、日本の研究所や大学の図書館とは比較にならない規模のものでも、何らかの特徴を出すことによって、十分に研究面や社会への還元といった面での機能を発揮できるものだと感じました。

あの頃のこと

法学部教授 中村賢二郎

10年程まえのはなし。モスクワで労働力の実態調査をしようと、エム・ゲ・ウ、すなわち、モスクワ市郊外のレーニン丘に聳え立つモスクワ大学に10ヶ月間滞在したことがある。労働者の国であるはずなのに、そうした研究調査の容易ならざることを入国後間もなく痛感した次第であるが、それはさておき、最近社会主義国の市民生活を紹介したTV番組のよくあるなかでも、この巨大なマンモス学園エリアにスポットをあてたものがない。世界各国の旧植民地国からの外人留学生をも含めて数千人もの若者が同じ建物内で快適な共同生活を送れるもろもろのゴージャスな設備がそれなりに完備していて驚いてしまった。

滞在中は専ら科学アカデミーの国家・法研究所とクレムリン近くのレーニン図書館での資料収集に没頭していて、同大学附属図書館をあまり活用しなかったのですが学期末・夏休み前になると図書の手続きをとる学生の長蛇の列にめんくらったことを思い出す。教科書から参考書・辞書にいたるまで一切貸出される独特な複本システムは、社会主義国の大学図書館ならではの特色といえよう。世界の新鋭研究者がここにしかない貴重な文献資料のコピーのために集るレーニン図書館の外国人留学生向けの複写手続時間帯は、毎日15～16時の1時間に限られている。それまでに如何に要領よく館内の必要な文献カタログを発見できるか。モスクワ生活のすべてのスケジュールは、この1時間のためにたてられた。朝霧のたちこめるモスクワ川の向う岸に建つクレムリンのウスペンスキー大寺院の尖塔を眺めながら、大学始発の111番バスで連日かよいつめたあの頃の緊張した留學生活がなつかしく思い出されてくる。

そのあと2ヶ月間のワルシャワ大学生活を経てミュンヘン大学に一年間滞在。同大学附属図書館内にはコイン仕掛けの自動コピー機が数ヶ所設置されて学生たちの自

由利用に供されている。折あしく申込図書の殆どが貸出中とあって、むしろルドヴィヒ通りをへだてた筋向いのバイエルン州立図書館のコピー機を大いに利用させてもらっていた。

「著作権の集中的処理機構」が全国的に考案されている昨今ではあるが、このような簡便なコピー機利用方法について本館でもこれから検討していったほしいものである。

さらに付言すると、大学附属図書館が地方の情報文化収集センターとしての社会的機能を十二分にはたすべきであるとするならばではあるが、最近のローカルTVドキュメントのなかには、歴史上かなり貴重な研究資料となる乃至はなりうる作品もあるので、こうしたTVビデオの収集保管にも配慮してもらえないものだろうか。情報化社会に向けてのこれからの図書館活動が専ら活字文化にのみ閉じ籠らねばならない必然性はどこにもない。図書館に背を向けた学生たちも映像や音響をとおして彼らなりの生存の論理を探っているのかもしれないからである。

香大図書館は利用しやすいか？

経済学部助教授 後藤伸

香川大学に赴任してまず驚いたのは、うどんがうまいことである。これは思わぬ僥倖であった。つぎに驚いたのは、附属図書館の管理運営のあり方である。これは思わぬ不幸であった。いままでわたしが利用した図書館のなかで、残念ながら、香川大学附属図書館はもっとも利用しにくい図書館の一つに属するように思われる（但しスタッフは別）。

利用しにくい一つの点、つまり昭和47年2月以降の刊行書について、著者目録がカードで作成されていない点は、近く図書館に入る予定のコンピュータシステムによって解消しそうである。利用しにくい他の点は、貸出冊数・期間が制限的で、期日超過の場合の貸出停止規則が厳格すぎることである。現在の規則の下では、講義やゼミのために必要な多くの図書を図書館から借り出すということは困難である。それを避けようとするれば、いきおい、いつでも、容易に、個人だけが便利に利用できる「研究室備付図書資料」（という名の図書囲い込み運動）に頼らざるをえなくなる。だが、図書館の利用をもっとも妨げているのは、まさにこの「研究室備付図書資料」制度そのものと思われる。

教官研究費で購入した図書がそのまま教官の個人研究室入りとなるこの制度は、図書はその利用者の傍らに置